

攻

Jorg Reichenbeck

わずかな喧騒が、耳に障る。
肌を貫くような寒気と、身体を震わせる強靱な浜風は、
舞台を極寒へと装飾していた。

一五メートル。

その距離を対峙する二人の間には、極寒によって限界まで希釈された空気しか存在しない。
そして、その関係は二二センチのボールを介してしか交わることがない。

交錯は一瞬。

数秒の後には、希薄すぎる関係は空白のものへと回帰し、そこには結果だけが残される。

勝者か、

敗者か。

蹴撃者はわずかに吐息。

白く曇るそれをかき消すように、助走を開始する。

ゆつく^ヲヲ^ヲ、地を確かめるようにゆつくりと一步を踏み出し、靴を通して短い芝を感じる。

球までの距離は、足音五つで消え去った。
残り、一メートル。

瞬間、全身を刺激する寒気によって世界が開く。
この瞬間にのみ味わえる緊張。

この時間のみ感じ取れる鼓動。

身体が機械化したかのような錯覚は、精密な弾道を描くために本能が引き起こすもの。

ただ思い切り振り抜き、ただ思い切り打ち抜くための予備動作。

数瞬遅れで、全力をこめた全身運動が始動する。

今までは^{セカンドモーション}より一段と強い踏み込み、金属製の軋みをあげながら針が地を噛む。

身体は思考を切り離し、精神の緊張を遮断。

足を、軽く速くに保ったまま、十分にひざを屈折させ後方へ振り上げる。

瞬間的に全身が稼働。

股関節での速度限界を維持し、上半身の作用を腰から先へと伝達。

鞭に酷似した身体は伝達を最適化、最高純度のエネルギーが膝を伝い、力の奔りが脚を滾らせる。

足首の関節へと伝わったエネルギーは、固定化された

足を通して二二センチの中心を狙い撃つ。

板を割る感覚。

当てるボールへの事後運動が総ての衝撃を速度へ変換

ボールが持った十分すぎる速度は、一メートルの距離を一瞬で食い尽くす。

瞬間

喧騒が変化した。